

千人つか

淀川堤防上にある戦争の碑

朝日新聞夕刊に「大空襲惨禍 描き残す ～あす大阪の慰霊法要で展示～」という4段ぬきの大きな記事が写真入りで掲載された。

以前から話には聞いていたが、まだ一度も参詣の機会がなく、今年は是非にと存知りの方をお願いをしていたところ、右図のようなご案内を頂き、早速同行することになった。

大阪の慰霊法要

当日は雨こそ降らなかったがなんとなく蒸し暑い日。淀川パークハウスから赤バスに乗り、公園前のひとつ手前の生江住宅前でおりた。（運転手さんが近いですと教えて下さったところ）早速会場へ向かう。

日曜日「城北菖蒲園フェスタ」の2日目とあって、公園内のステージではブラスバンドや太鼓、音楽演奏、ダンスなど、また、広場ではフリーマーケット、各町内会ボランティアの飲食店、新鮮野菜売り場、体験コーナーなどで大賑わいだった。ご町内の顔見知りにもご挨拶をしたり、「がんばってね！」などと声をかけながら会場へ進む。

30分も前だというのに一張りのテントの中はほぼ満員で、遺族の方は殆どが喪服、年配の方は娘さん、お孫さんに手を引かれ、毎度お顔なじみは杖を突きながらお互いに挨拶をかわしておられた。

知人に東浦さんを紹介してもらい、太子橋の地域史を進呈して、今日のことを旭区の地域史に掲載させてもらう許可を得た。勿論写真撮影もOK。式が始まる

6月、大空襲の犠牲者・・・

爆弾や焼夷弾が降り注いだ。
機銃掃射も受けた。
こうして、旭区城北公園の惨事、大淀区長柄橋や東淀川区崇禅寺の悲劇が展開されたのである。
（当日配布された資料より抜粋）



写真■千人塚



図■案内状

前に、昨日夕刊の記事にあった真弓百合子さんが描いた大空襲の絵も含め、辺りの様子をスナップした。お願いして東浦さんの肖像も撮らせていただいた。式が始まるとなんとなく動きにくく、いい写真は取れなかった。

司会者の式次第、施主の挨拶に続いて導師の読経が始まると、施主、各種代表、遺族、一般と焼香が30分ほどで終了した。それから当時この場におられたかたがたのお話があった。



写真■千人塚慰霊法要

戦争はいまわしい
だからこそ語り継がなければいけない。
決して記憶からなくならないように

四国からみえた河原節子さん80歳は、「挺身隊で大阪へ働きにきていて空襲にあい、多くの友人を失った」と、もう今をおいて誰があの忌まわしい戦争を語り継ぐことができるものかと、不自由な足に杖を突きつつ語られた。地元のかたが私財をなげうって慰霊を続けてくださることに深い感謝の念を禁じ得ないとも。そして、健康の許す限り法要に参加し続けたいと言われた。お友達4人と皆の前でとてもしっかりと話された。

両親と姉妹を亡くした方は、「4人の遺体を火葬した記憶が今も忘れられない」と語られた。

当時16歳くらいでそんな目にあつたらと、本当に戦争はこの世の罪悪であるとの感を深くした。



写真■東浦さんご家族



写真■被災した思い、多くの友人達の死の重みを語る



写真■両親・姉妹4人の遺体を火葬した記憶を語る

愛する家族を亡くし、多くの友人の死を見ることを忘れられるわけがない。

終わりに、司会者から「長年の東浦さんのご苦勞に対し、本人はもとよりご家族の支えがあつてのこととみんなで感謝の拍手を」と言われ、ご家族が始めてみんなの前に顔を見せられた。

ご尊父栄二郎さん（故人）が建てられた千人塚を行政による公的な慰霊行事がないなかを、ずっと守り続けてこられたことに心より敬意を表したい。

これからもきっと、ご家族が受け継いで下さることであろう。

参加者は毎年100人くらいなので、そのつもりで準備していたら、当日は150人ほどになって、椅子などの準備が追いつかず大変だったと聞いた。前日の夕刊の記事も影響したのだろうか。

後日、一人で訪れた千人塚は人の気配は無くひっそりとしていた。ただ真夏の風が途絶え耐えられない暑さであった。（このような状態を俳句では「風死す」という季語を用いる）

64年前、前途ある幾多の命が奪われた魂の声なき声を聴いていただけたら幸いに思う。

佇みし千人塚に風死せり



写真■千人塚の碑に添えられた絵

左は真弓百合子さん、右は栗林幸子さんが当時の忌まわしい様子を描いている。

亡くなった人たちが眠る場所